

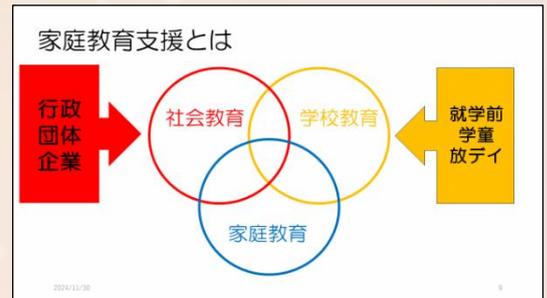


講話「つながる つなげる コミュニケーション」

郡山女子大学家政学部生活科学科 教授 小林 徹 氏

○家庭教育支援とは

昔は子供会や地域の町内会、寄合や子どもたち同士のつながりもあり、「つながろう」と言わなくても、つながっていた。かつては、家庭教育支援は学校教育、家庭教育、社会教育があり、三つ全てがバランスよく成り立つことで、健全な子どもの育成ができていた。しかし、今は家庭の中が見えにくくなっている。社会をみると、行政、ボランティア団体、企業など地域を形成している他者たちが決して一枚岩ではなく、それぞれがそれぞれの目的に応じて、動いており、十分につながれていない。学校でも幼稚園・保育園・子ども園、学童保育、放課後児童クラブ、放課後児童教室などのつながりが一枚岩になっているかという点、これも難しい。



○連携の難しさと学ぶ必要性

連携はとても難しい。実際に経験すると分かるが、経験してきていない人はどのようにしているのだろうかと思う。特別支援教育では、保護者支援と関係機関の連携はいわば必須ワードである。ところが、特別支援教育の教職課程で必修になったのは令和元年からで、それまでは特別支援学級、特別支援学校の教員だけに専門性があればよいのだという状況だった。特別支援教育が必修になったことで、保護者支援や関係機関との連携の重要性も学ぶことにつながっている。

○なぜ保護者は気づかないのか～保護者は変化するのか

保護者に子どもの現状をどれだけ話しても、自分の子どもの障害について理解しようとしなない。保護者は我が子の障害を見ようとしなない、見て見ぬふりをする傾向がある。やがて他の子どもとトラブルを起こすなどすると、保育所へその苦情が入る。保育者が、直接的な強い表現で子どもの実情を理解させようとする、保護者との関係が悪化してしまう。保護者としては学校でも家庭でもどこに行っても、嵐の中に立ち尽くしているような心持ちかもしれない。救うための道は、安心できる信頼できる他者・大人と出会わせることであると考えます。

○生まれてから今日までを知る

私が中学校教員5年目の頃、ダウン症の子を産んだ小学校教員の母親が、メンタルをやられて、その子とその姉を二人とも殺してしまい、そして母親も自死するという痛ましい事件があった。中学校教員の私としては、障害があると分かってから中学校入学までのことは全く無知だった。この親子はどういう人生を送ってきたのだろうか。障害があると分かった後にどういう機関を回っているのか実際に調べてみた。このことが自分自身にとって関係機関との連携のスタートだったかもしれない。産婦人科や保健所、保健センターなどなど。縦割り行政の狭間で翻弄され、放置される姿が見えてきた。これを機に教員によるネットワークを作り始めた。

○保護者の変化に学ぶ「それが言えるくらいなら、こんなところ来ませんから」

ネットワークでの講演会において、参加した方の子どもの保育を担当することになり、そのとき大きな経験をした。5歳児を連れてきた母親がいて、私が子どもに「お名前は」と聞いたら、「それが言えるくらいならこんなところ来ませんから」と言われた。もう背筋が凍った。その子は多動児で、走り回り、私の肩まで登り、飛び降り、本当疲れ切った2時間だった。やっと講演会が終わったらと思ったら、母

親がすごい顔して、「うちの子いますか」と来た。「いますいますよ、ここに」と言うと明らかにほっとした様子だった。いつもこのような会では、大抵15分経つと、「お母さん来てください。もう無理です。」と呼び出され、今日も15分で終わりだと思っていたが、呼び出されないことが不安となり、終わった瞬間に飛び出して来たとのことだった。「時間たっぷり遊ばせて頂きました。」と言ったら、「ありがとうございました。」と言って帰っていった。それ以来、研修会等で子どもを預かると「今日はどうでしたか」と聞いてくるようになり、その後の全ての研修会に参加することができるようになった。就学時には養護学校の小学部を選択した。もしかしたらこの学校に進学すれば、私たちの幸せな時間があるにちがいないと思えたのかもしれない。私はこの経験で「お母さんは変わる。変わりたいと思っている。」と確信し、どんなに怖い母親でも根気よく接することができるようになった。

○保護者の気持ちに寄り添う

学生の保育実習で、「子どもが保育園で初めてできたことについて、親に伝えてはいけない」と言われるらしい。それはなぜか。偏食が強い自閉症の子どもに、給食の際、その子の周りに給食大好きな子どもたちを集め食べさせていたところ、あるとき、フライドポテトが出た時、試しに食べてみたら「旨し」と言った。母親にそのことを連絡したら、「そうですか」とだけで乗ってこない。ところが、卒園する頃、母親に「偏食無くならなくてごめんなさいね」と伝えたら、「先生、この子はもう誰の前でも食べられるんです。」と返答があった。聞くところによると、実は父親がものすごく怖いらしく、父親の前で食べるものでも、母親の前では決して食べない。母親としては、どうして私の前では食べないのと悲嘆していた。でも、この前買物に行った時、マクドナルドで、フライドポテトを食うように食べた。この子は私の前ではフライドポテトを食べたことがなかったのに、誰の前でも食べられるようになった。初めて先生方に感謝する気持ちがわいたと伝えてくれた。特に、初めて出た言葉、ママやパパという言葉が園で言われてしまうと親は傷つく。だから初めて言葉が出たときには、「そろそろ言いそうですよ。」と連絡帳に書くそう。すると、「今日言いました。」と喜びの声を上げてくる。そういう細かい気配りが保護者とつながるためには大事なことだと実習で教えているようだ。

○ともに子どもの将来を見る

保護者との関わり方は、両者が真正面から対峙するのではなく、肩を並べて子どもの未来を語る姿が望ましい。そういう意味では、就学を間近に控えた年長の時期がチャンスとなる。相談支援ファイルや就学支援シートを作るときに、小学校入学時にどうソフトランディングさせていこうかというような言い方をすると、一緒にシートを作っている。つまり、子どもを真ん中において共に未来を見るという姿勢になってくれる。幼保小連携では、5、6歳と小学1年の架け橋期2年間に、共通のカリキュラムで指導しようと取り組んでいる。幼保小の先生がミーティングや親睦会をしたり、交流の行事をしたりしている。また、指導要録をバトンタッチの資料として引き継ごうとしている。内容の接続、人的な接続、資料の接続が行われている。

○実際に障害児と触れ合った児童の感想。「違い」を突き抜けた向こう側に立つ。望ましい連携とは。

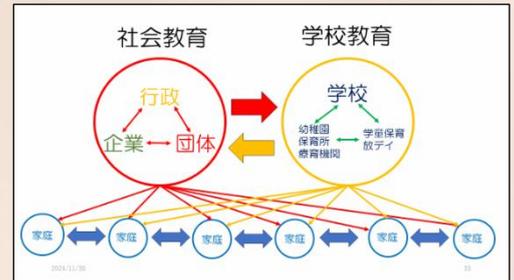
中学校の通常学級で特別支援学級を理解してもらって授業をした。アンケートで「僕は障害児を差別しません。同じ人間なんだから。」という回答があった。でも、そういう生徒に限って特別支援学級に来たことが1回もない。京都府の養護学校で市町村学校との交流学习に取り組んだとき、初めて交流した小学2年生女子の作文では、「私はとても気持ちが悪かった。先生がお話しして友達なろうねって言ったけど、みんな小さな声で気持ちが悪いあとと言っていた。ほとんどの人がそんなことを思っているみたいだった。」初めて未知との遭遇をした子の率直な印象だった。交流を積み重ねてきた4年生男子は「1年生の頃はよだれに手をつけなくて、その手で手をつなごうとするのでいややった。御飯を食べるときも御飯をポロポロこぼしたり鼻をつけるのでおえが出そうやった。今はよだれが手についてる手でも、手をつなげるし、肩に手をおきなくても、膝に乗ってきなくても嫌だと思わなくなりました。おんぶもできます。養護学校の人たちともっと心が通じ合えるようにしたいです。」この子は違いを乗り越えた気がする。「おんぶもできます」が誇り高



く聞こえる。交流によって、いやだ汚い怖いを乗り越えた向こうに、この子も同じ人間だと思える気がする。違いを突き抜けるためには、違いを知らないといけない。『連携』は、よく知り合い、けんかもするけれど突き抜けた向こう側に立ってほしい。簡単ではないが、連携できたときの満足感はすごい。実はよく知り合ってもやっぱり連携できないという場合もある。それでも大人の付き合いはする。互いの違いを尊重しながら、一緒に取り組める部分を考え、具体的に実践したい。

○つながる つなげる コミュニケーションとは

コミュニケーションは一对一の双方向である。最初は一方的であるが、これがやがて双方向になり、それがネットワークとなっていく。私がずっと今まで経験してきたことが、実際に、県中地域の実態になっていくといいと思う。社会教育は行政だけでなく、企業や様々な地域団体の力も必要だ。学校教育も本当につながってもらいたい。そして、ふわふわ浮いているような家庭の状況を、社会教育から学校教育に働きかけ、そして、学校教育も社会教育を活用しながら地域へとつなげる。社会教育、学校教育の有機的な連携をすることによって、地域に魅力あるアピールとなり、具体的につながり手段になってくると考える。そして、自然と家庭同士もつながってくる。「どうしたらいいのかな。つながってみようかな。つなげてみようかな。よしつながってみる、つながっちゃった。本当につながったのかなあ、やっぱりつながってる」ということの繰り返しだと思う。それらの経験をみんなが共有し、見つけていく。きっと魅力的なものになるはずだ。



○グループ協議

グループごとに「10年後の家庭教育のつながり」について現状認識を共有し、ビジョンの策定をした。ビジョンの策定では、メンバーに共通しているイメージを言葉で紡ぎ「私たちは、〇〇で、△△な、□□という家庭教育のつながりの実現を目指して取り組みます」というキャッチフレーズの形で言語化する協議を行った。

○ビジョンの策定 キャッチフレーズ

「私たちは、互いの役割を理解し、明るく協調し、個性を尊重し合える家庭の教育のつながりの実現を目指します。」「感謝の気持ちを忘れずに周りのスタッフと協力しながら保護者に寄り添っていききたい。」「私たちは有意義で主体的に感謝の心を忘れずに、家庭教育のつながりの実現を目指して取り組みます。」「私たちは心が元気で相手を思う素直な言葉を伝えられる人になりたい。」「私たちはいくつになっても、前向きな姿勢で、共感的な言葉があふれるコミュニティーで居場所を見つけている。」「私たちは地域社会で心豊かな子供たちを育てるといふ、家庭教育のつながりの実現を目指して取り組みます。」「私たちは人とのつながりを大切に、切れない家庭教育のつながりの実現を目指したい。」

○まとめ

10年後に自分がどうなっているのかという不安を思いつつも、それでもいい未来であってほしいという願いが、行間にあふれていると感じた。それだけこの仕事は、子どもたちが豊かな心を持ち笑顔で暮らせるコミュニティーを創りたいという願いがあると思った。これから何ができるのか、探すのも楽しいこと。決して無理せず、できる範囲で笑顔を増やしていける仕事を続けていけるようにしたい。

○参加者の声

- ・特別支援の子どもたちとそれに関わる保護者の気持ちが分かった。つながる、つなげるという事はとても大変だと思った。お母さんとのコミュニケーションも大切だと思った。
- ・一緒に取り組める事を考え、継続を途絶えさせないようにすることが大事だと感じた。
- ・保護者と向き合い、保護者の気持ちに寄り添うことから、つながるつなげるコミュニケーションの大切さを丁寧に教えていただいた。

